

## 新型コロナウイルス感染拡大についての医学生の見解に関する研究

前田 春斗

現在、世界各国で新型コロナウイルスが猛威を振るっており、日本でも感染拡大が続いている。それに伴い医療従事者の働き方が問題視されるようになった。また、医学部の受験者数が低下するのではないかとということが懸念されている。

本研究では医師を志しているが、まだ学生という立場である医学生が新型コロナウイルス感染拡大についてどのように考えているのか、また自身の医師としての職業観の形成にどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とする。本研究が達成されることで、今後の医学教育の在り方に新たな視点を提示し、特に医師としての職業倫理の教育を発展させる一助になると考えた。また、社会問題となっている医師の働き方を解決するヒントを提示すると同時に医師の労働環境が向上するきっかけになると考えた。

本研究では、医学生一人一人のライフストーリーや医師としての職業観に焦点を当てるため、半構造化インタビューを行った。筑波大学医学群医学類の1～6年生9名に協力を依頼し、対象者の中には、複数回インタビューに答えてもらった者もいる。その中で、コロナ禍の医療現場での勤務を希望するかを調査し、得られた回答を分析し、「肯定」「許容」「否定」の3種類に分類した。また、新型コロナウイルス感染拡大を懸念して、インタビューはオンラインでの実施を行った。いずれの調査も、2020年4月から12月にかけて実施した。

本研究の調査から、以下のことが明らかになった。①医学生の超義務に対する意識の違いにはロールモデルとなる医師の有無が関係している。②多くの医学生が医療の「現場」に影響を受けている。医学生が医療現場から受ける影響は、大きく分けて2つある。1つ目は、現場で働く医師や患者が及ぼす影響である。2つ目は、医療現場の雰囲気が及ぼす影響である。医学生は、直接医療現場に足を運ばなくても現場の雰囲気を感じ取り、影響を受けることがある。③医学生は職業観が専門分野に細分化されている。どの診療科に進むかまだ迷っている医学生もいたが、忙しさや内容の面白さ、仕事としての充実度など、それぞれ異なる基準の中で選ぶ軸の優先順位を定め、それに合致すると思われる診療科を多くても3つには絞っていた。

上記の結果から、コロナ禍のような世界的な医療危機に対して積極的に貢献していけるような医師を育てるためには、医学教育に携わる医師たちが医学生のロールモデルとなるような行動を取ることが重要であるということが分かった。また、医学生の取り組みたい専門分野や、理想とする働き方は人それぞれであるためそのことに配慮する必要があると考える。

(指導教員 照山 絢子)